

声のでない日に思ったこと

伊集院理子

私は、風邪をひきかけるとすぐにのどにくる困った持病がある。保育者という声をよく使う仕事についていながら、季節の変わり目に年に二、三回声がでなくなってしまうのである。朝起きてのどが少々いがらっぽいと感じた日、保育中はどうか声がでるのだが、子どもたちが帰った後、少

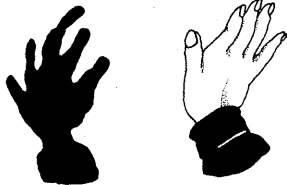
しの間黙っていて、さて同僚に話しかけようと思うと、もう声がでない。いざ声がでなくなったら慌てて、うがい、のどあめ、のどスプレー、さらには吸入器と、あの手この手で回復をはかるが、一旦声がでなくなると、少なくとも二、三日はかかってしまう。しわがれ声でも出ればまだい

いのだが、ほとんど相手に聞きとれないような声で保育をしなければいけない羽目に落ちいつてしまう。そうなる前に予防ができればいいのに、それができない性格で、いつも声がでなくなつてからあたふたしてしまうのである。

そんな状態の時に、人に出会うと、口々に「仕事どうしているの?」「仕事にならないでしょう」と言われる。教師と言葉で教え諭す職業というイメージがどうしても強いのだろう。私自身、保育者になりたての頃は、そのイメージからくる気負いがあり、大きな声を出して、子どもたちを動かそうとしていた。でも、今は少し成長し、声がでなくても「仕事になる」ようになってきた。

朝、「おはようございます」としわがれ声でありさつすると、「また、声、でないの」という反応が子どもたちからかえってくる。声がでないとわかると、いつも以上に私の言うことに耳を傾け

ようとしてくれたり、中には、私にあわせてひそ声で話かけてくれる子どももいる。私の声がでなくとも、子どもたちにとっては、いつも何ら変らぬ一日で、やりたいことを自分で見つけ、それぞれに遊びだす。私に用がある時は、近くに寄ってきて、「○○つくるから○○ちょうだい」と話しかけてくる。それを聞いて、子どもの要求するものを渡してあげればよい。子ども同士のトラブルがあつた場合は、こちらから子どもたちのいる所へ参上し、それぞれの言い分をよく聞いて、相手にそれぞれの言い分を伝えたりしながら折りあいが見つける方向性を一緒に



考えていく。ひそひそ声でも、私の伝えたいことは、一応聞いてくれる。最終的にどう折りあいを付けていくかは、子どもたちに委ねるようになる。声がでなくとも身体は元気なので、子どもたちと一緒にサッカーをして走りまわる。一つのボールを追っかけて走りまわるのに声は必要ない。お庭のおままごとのレストランにごちそうになりに行く。子どもたちが、それぞれにつくったご自慢のごちそうを差し出してくれるので、おいしそうにごちそうになる。その日にしたことを思い起こしてみると、子どもたちがそれぞれにやりたいことを見つけ、自分たちで遊びをつくっていくごく普通の保育場面では、保育者が大きな声を出す必要はほとんどないのである。

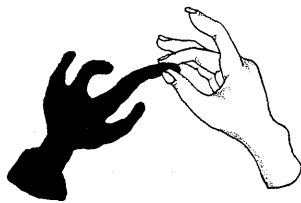
とは言っても、普通に声がでる時には、声、言葉にどうしても頼ってしまうのだ。声がでないもどかしさを感じたのは、次のような場面である。

遠くから遊びの様子を見ていて、困ったことをしでかしている所を発見してしまい、「A君、それは、やめて！」と咄嗟にその場から大きな声を出したくなって、声がでなくてハッと気がついた。子どもの行動を制止したり、制限したりする時に、どうしても声を頼りにしてしまう。瞬時を争う時には大声をはりあげざるを得ない時もあるが、大体は、そんなに切羽詰まっていけない場合がほとんどである。それでも、「やめさせたい」と思った瞬間に声がでてしまう。気になることを見かけたら、まずは、子どものそばに歩み寄って、子どものやっている様子を身近によく見て、それでも「やめさせた方がよい」と思う場合は、子どもの手をそっと押えたり、抱きとめたりして、わたし自身の身体を動かして身体と身体の触れあい、子どもの行動を制止することができるはずである。もどかしさを感じつつ、声がでない分その

日はいつともより意識的に身体を動かして見て、
う実感した。

子どもたちがそれぞれにやりたいことを見つ
け、自分の思うようにそれを展開していくことを
一番大事に考えている私どもの園でも、子どもた
ちが集う場として、片づけ、お弁当の支度、お帰
りの支度など、集団として一つの方向性を示して
いかなければいけない時がある。そういう時、全
体に周知徹底させるには、大きな声を出すのが
手っ取り早い。でも、私どもの園では、そういう
時も、担任が大きな声を出して子どもを動かすこ
とはできるだけしないようにしている。声がでな
いその日、「そろそろお片づけにしましょう」と
一言私が言うと、もうそれ以上何も言わなくても
「はやしのくみ、お片づけ」と口々にリズムをつ
けながら言いあって、あっという間にお片づけの
態勢になっていった。そこそこには片づいてきて

いるのだけど、最後の詰めがなかなか進まない時
に、又、大きな声をだしたくなかった。正直言っ
て、よく陥るパターンである。はじめは、「そろ
そろお片づけにしましょう」と個別に声をかけて
いくが、それだけではなかなかやってくれない時
もあり、あまりの遅々たる進み具合に、だんだん
あせりを感じてきて、心中穏やかではいられなく
なって、「さあ、もう
やめて、片づけましょ
う」と、声のトーンが
どうしても大きくかつ
強くなってしまうので
ある。でも、声がでな
いその日は、腹を決め
て自分の身体を動かし
て、子どもたちに小声
で具体的に働きかけて



いったら、わずかの間に、詰めの所まで片づいていた。

お帰りの時間まで、あと少し時間が残っていた。時間に余裕がある時は、本を読んだり、ゲームをしたり、少しでもみんなで楽しい時が持てるように常日頃心がけているが、何しろ声がないのではどうしようもないと思っていたが、ふと小さい組の時から何度も読んできた『もこもこ』(谷川俊太郎作 文研出版)の本ならば、本のページを私めぐるだけで、子どもたちが声を出してくれるにちがいないと思ひあたった。『もこもこもこ』は絵それ自体が音を表現している本で、「もこもこ」「ほろり」「つん」「ふんわ、ふんわ」とか、その絵にびったりの音がつけられている。私は、ページをめくるたびに、声はださずに、出来るかぎり表情や身ぶりで音を表現するようにしたたら、子どもたちが次々と声をだしてくれ

て、期せずして私が声を出して読むのとは又ちがう貴重な絵本体験ができた。

声がない数日の間、大きな声をはりあげなくても「仕事になる」ようになった自分自身の成長、担任を思いやってくれる子どもたちのやさしさ、口うるさくこちらで言わなくても、毎日の生活の流れが定着して子どもたちのものになっていること、まだまだ言葉を頼りに保育をしている場面が多いことなど、色々と感じることが多かった。声のでる日常においてもこの日の体験をいかし、自分の身体を動かして、言葉に頼らずに子どもと響きあっていたい。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)